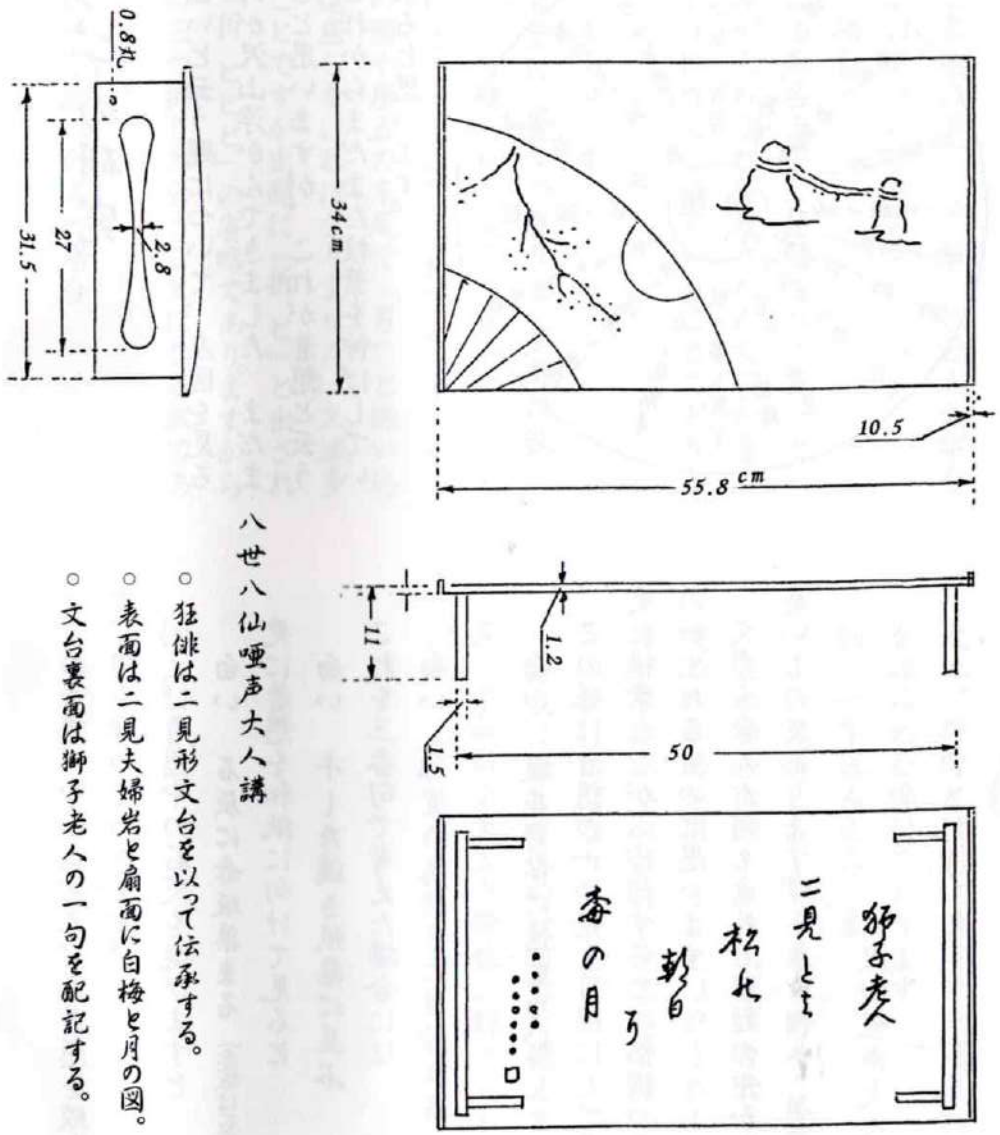
二見形文台の見取図



八世八仙唖声大人講

○狂俳は二見形文台を以って伝承する。

○表面は二見夫婦岩と扇面に白梅と月の図。

○文台裏面は獅子老人の一句を配記する。

狂俳の着想について

～平成五年七月講座から～

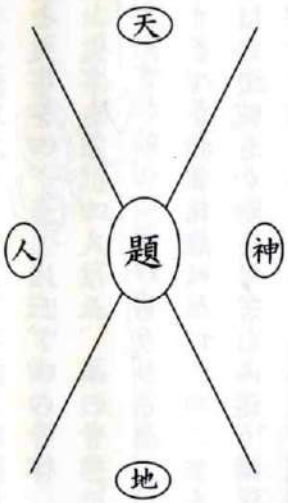
九世八仙斉　田中山里

狂俳では、予め題が出されるので出された題を十二音律の句によってユーモラスに表現しようと云う遊びの文芸であるが、作句にあたって七五調か五七調の何れでもよいが、題に使われている漢字は使わない、と云う事と、句の末尾は「る、い、く、ぬ、す、む、な、つ、ゆ、う、り、ふ、ん、た」必ず此の十四文字のどれかを使った動詞で括らなければならないと云う約束があります。

さて、選者が句を選ぶに当っては、定座がありますから選んだ句をそれぞれの定座へ嵌め込んでいく為にいろいろな分野の句を必要とする訳でありますから、投句をする側にとっても各種分野に着想を展げて考える必要があると思います。

そこで次の図のように着想分野を始めから分けて考えると云うのも一つの方法ではないかと思う。

着想展開のし方



例えば題の処を「鶴」とした場合

神の分野では…原爆の碑へ千羽折る

天及び地では…網走り沼へ客降りる

人の分野では…千羽に折って師を見舞う

このように作句者の力量によって着想の範囲が展がっていくのではないかと思う。

◇ 狂俳は冠句とは違って題と句の間に少し間を置いて詠うこと、句の中から題が浮び出るように考えて、軽妙洒脱の気風を忘れないことである。

例、大きな声　茶碗の割れる音変じる

そわそわ　家風に馴れぬ嫁若い

◇ 季語に対して八重ざるよう季を入れて詠むが、季感の溢れる句が出来れば必ずしも季語を使わなくてもよいのではないか。

例、木枯　釘の緩んだトタン鳴る

◇ 探題について、選者は見返内の十二句に対して七・七の調子で探題を添えるが、探題は脇句とも云って選んだ狂俳の説明であってはならない。選者の立場から題と選び句の間の余情を詠う事によって、句の味の部分を補足する訳であるから、探題は句末に余韻が残る句に仕立てるよう心かけることである。

探題は七・七調で詠い、座七（後の七文字のこと）を漢字で止めることを通例としているが仮名止めもやむなし。但し語呂の良いものにすることが肝要である。それには七・七の十四文字を更に次のように区分して使い分けると探題が柔らかく、しかも余韻が残し易くなるのではないか。

記

前七文字を四、三又は三、四の音律

座七文字を三、四又は五、二の音律

◇ 難しい言葉の句は避けよう。

「はてさて…切歯扼腕岐路に佇つ」歯をくいしばって腕をかかえて苦しみ迷う情況であるが

「はてさて…俎の鯉どう捌く」と平易に云う方が理解し易いと思う。

狂俳作句の指針

狂俳を作るには

凡そ五つの重要な点がある

～平成五年十一月～

十世細味庵　松井琴昇　稿

第一、着想の選定

どうしてもありふれた着想では、その会が大きくなればなる程類似句が多くなり易い訳である。類似句はそれがいくら良い句と思われても選者の立場では採択できないのが常識である。

発題を見てすぐ頭に浮かぶ着想は世間での常識事が多いため、誰の頭にも共通して浮び易いものではないのか、思いつき易い着想だから類似句になり勝ちだと思う。

或る処の会で「秋の風」と云う題が出され、二十五組投吟されたが、その中の九句は稲穂を詠ったもので占められていた。これは秋の風と云えば、稲穂か赤トンボが誰の頭にもすぐ連想される日本人独特の風土的な感覚ではなかろうか。これらを連想する事は至極あたり前の事ではあるが類似句となり易い着想である、と云う事になる。従って選者の眼を惹きつけさせる為には、すぐに浮んだ着想から第二、第三と連想の範囲を展げていく事が大切である。

狂俳の題は大きく分けて季題と雑題の二通りある。季題の句は必ず季を遵守して風景、行事、生活等を詠むが必ず季語を必要とする訳でもない。充分な季感があればそれもよい。

季題の場合は、連想する範囲を次の五つに分けて着想目標とするもの一つの方法である。

①天文気象　②景色景観　③人事行動
④神釈行事　⑤動植物

仮に題が「霞」と云うような①に属する場合には〝温か〟とか〝風光る〟などと云うよりもむしろ③の人事行動とか、⑤の動植物など少し離れた処から連想させるように詠み上げた方が上作が出来るのではないか。

また人事の題にしても人事の事ばかり見ていると視野が狭くなり、題に近付き過ぎる虞れがあるので他に眼を向けて、連想の輪を展げることが肝要である。

雑題の場合には題をよく掴んでから作句にかかる事、平仮名一文字の扱いにも注意をしなければならない。仮に「と、も、を」この三つの文字の使い分け、「何々と」「何々も」この二つの言葉は一つの物を指すのではなく、ついでがあり複数の物を指しているのに対して「何々を」と云った場合には単独を指す言葉である。

もう一つ大事な事は「彼我を間違えない」と云うことである。

〝痛い〟と云う題に対して「弁慶泣いて主君打つ」と詠った場合、これは弁慶を詠った句であるが、打つ弁慶はちっとも痛さを覚えぬ筈で、打たれる主君義経が痛さを堪えている訳で、義経側の心情を詠う必要があったのではないだろうか。

第二、題と句の距離

「霞」と云う題に対して〝棚引く山に…〟これは続き文句である。離れ過ぎても題意を見失うし、それかと云ってどんな題にでも合う句は適当ではない。「寺尾の桜」とあればその辺りの地名なり、特産物なりを詠み込む事に依ってハハン寺尾の桜だな、と判るように詠み込ませないと吉野でも、高

遠の桜にでもなってしまう訳で、題意に沿った句とは云えない訳である。

元来岐阜調狂俳は題の事柄に直接触れないで、その周りの関連した事象を上手に表現することによって第三者の読む人や聞いてくれる人達が成る程と一瞬にして頷いてくれるような句を求めているのではないだろうか。

何事でもその事柄に附随して言葉は出てくるもので「喝采」と云えば「ホールイン見事に決まる」と云えばゴルフであり、「花道で六法決める」と云えば歌舞伎の事である。岐阜調狂俳は冠句と違って題と句の間に「間」を置く必要がある。これを距離と云って句味の深さに繋がってくるものである。

月とか花においても、又他のものでもずばり月とか花とかを直接指さずに他の景色や物を拾い上げて詠むことにより、見る人聞く人達が月とか花とかが感じられるように作句することである。

夜空に澄むと云えば月か星より他にはなく爛満と咲くものは花である。春の山の宴は花であり、秋の山の宴と云えば茸狩りの事である。又、特に有名な花の名所などは、その名所の名前だけで花を表わすことも有り得る。

兎に角岐阜調とは、その事柄を軽妙洒脱に表現することが大切で、出来るだけ簡略して急所だけを謎をかけるように、しかも題意を遠く背かざるよう綴ることである。

古句鑑賞（昭和五十一年九月号樗流誌から）

花　野　　撞かれて西す陽に対す
優さ睨み　　盃洗へ猪口沈まかす
大笑い　　控え室には呉越ない
嫌なお使い　　夕陽に尺を入れて居る

光り　鍋炭のような空割れる
朝湯　娘も余所の人になる
酒　物よう言わぬ馬寒い
大違い　鬼でなかった人拝む

第三、座五について

狂俳や俳句では括り五文字のことを座五と謂われている。要するに狂俳では括りの五文字の使い方によって句が活きるか、死ぬかを左右する大切な五文字であり、句に生命を吹き込む五文字であるとも云える極めて大切な処である。

折角良い着想を見つけても座五で旨く括れなければ全く価値のないものになってしまう。頭の七文字で着想を捉えて後の座五に依ってその着想に息を吹き込む事が出来ればその句は成功と云える訳である。

頬冠り　焚火へ鼻を摺り上げる
寒さに洟を拭き上げながら焚火の側へ寄っていく老人の姿を旨く捉えている。

判った　水の抜け穴芹が舞う
田の水が溜ってこないので畔づたいに調べて廻って見ると、ザリ蟹かそれとも土竜の穴か、ゴミや芹屑が渦を巻いて汲い込まれていく所が見つかった訳である。

第四、語呂について

狂俳は七五調、若しくは五七調の十二音律で綴ることになっている訳であるし、多くの場合選者が唱詠して発表することもあって特に呂律の良い句に仕立てる事が肝心である。キャ、キュ、キョ又はシャ、シュ、ショの場合は一音と見做すがキョウ、キュウ、ショウは二音と見るべきではないかと思う。

さて、狂俳は座五に於いて句に生命を吹き込むのだと述べて来たが、作句に当っては狂俳十二文字を七五調か、逆の五七調での仕立て方になっていく。七五調で仕立てた句は間違いなく動詞で括ることが可能であるが、逆に句を五七で仕立てようと思うと座七の七文字を更に四、三か五、二の語呂で括るように工夫しないと動詞で括ることが出来ない。三、四調の語呂は凝問詞になる虞があるからである。

第五、推敲

これ迄夢中になって仕立てた句であるが時間を置いて見直すと意外な失敗等が判って来るものだ。

草巻きを見ていると一巻の中には随分と題噛りや、季違い、季重ねを発見するし、誤字、脱字も多いものである。小さな会では選者が善意で直すことが有っても句の添削までは出来ない。凝問句は振り落されてしまうので、自分で良く点検してから投句するように心懸けることが大切である。